

## 9価HPVワクチンの定期接種化に関する MSD株式会社のステートメント

この度、予防接種実施規則の一部が改正され、2023年4月1日から、子宮頸がんなどのヒトパピローマウイルス（HPV）感染症の予防を目的とした小学校6年生から高校1年生に相当する女子の定期接種と、平成9年度～平成18年度生まれの女性に対するキャッチアップ接種に、9価HPVワクチン「シルガード®9 水性懸濁筋注シリンジ」の使用が可能となりました。

日本では、毎年約10,000人の女性が新たに子宮頸がんと診断され、年間約2,900人が亡くなっています<sup>1</sup>。また、子宮頸がんは20代、30代の若い女性でも罹るがんで、発症年齢が出産や働き盛りの年齢と重なることもあり、治療によって命を取りとめても女性の人生に大きな影響を及ぼすことが多い疾患です。子宮頸がんの予防方法には、10代からのワクチン接種と20歳になってからの定期的な検診があります。

今回、定期接種として使用可能となった「シルガード®9」は、9つのHPV型（6、11、16、18、31、33、45、52、58型）に対応した9価HPVワクチンで、子宮頸がんの原因となるHPV型の88.2%<sup>2</sup>をカバーし、これまで定期接種で使用されている弊社の4価HPVワクチンの65.4%<sup>2</sup>と比較して、より広く子宮頸がんを予防することが期待されます。また、本年3月に9価HPVワクチンは、従来の3回接種に加え、9歳以上15歳未満の女性に対しては2回接種の「用法及び用量」が薬事承認され、定期接種では小学校6年生から15歳未満の女性に対して2回の接種も可能になりました。これにより、接種を受ける方をはじめ接種に関わる方々の負担軽減に貢献できるものと考えています。

世界では、50以上の国と地域が9価HPVワクチンを定期接種に採用しており、米国を含む諸外国では概ね11～13歳を対象に9価HPVワクチンの2回接種が推奨されています<sup>3</sup>。日本でも世界と同様の接種環境が整ってきたことは、日本における子宮頸がん予防の推進にとって大きな意義があると考えます。

WHOは、子宮頸がんの征圧に向けて、2030年までに「ワクチン接種率90%（15歳未満の女性）」、「検診受診率70%（35、45歳女性）」、「子宮頸がん（前がん病変含む）治療率90%」とする目標を掲げており<sup>4</sup>、接種が進んでいる一部の国では、子宮頸がんそのものの予防効果も報告されています<sup>5</sup>。

最先端のサイエンスを駆使して、世界中の人々の生命を救い、生活を改善することをパーパスとするMSDは、今後も子宮頸がんなどのHPV関連疾患から人々を守ることができるよう、最大限の努力をしております。

<sup>1</sup> 国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」(全国がん登録/厚生労働省人口動態統計)全国がん罹患データ(2019年)/全国がん死亡データ(2021年)

<sup>2</sup> Sakamoto J et al. Papillomavirus Res. 2018; 6: 46-51

<sup>3</sup> 第19回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会予防接種基本方針部会2022(ワクチン評価に関する小委員会 資料1-1)

<sup>4</sup> [A cervical cancer-free future: First-ever global commitment to eliminate a cancer]. [<https://www.who.int/news/item/17-11-2020-a-cervical-cancer-free-future-first-ever-global-commitment-to-eliminate-a-cancer>]; World Health Organization

<sup>5</sup> Lei J et al. N Engl J Med. 2020;383(14):1340-1348.